

西方アジアに於ける考古學的活動 (中)

一九三二年—一九三四年

禰 津 正 志

III イ ラ ン (ペルシヤ)

シエルとド・メックナンの指揮するフランス探險隊はスーザ^①で仕事をつづけた。その遺跡は一九〇〇年以來よく發掘されてゐるが、さらに有望な見透しを與へてゐる。發掘毎に新しい偶發材料が現はれた。

① R. de Mecquenem: Notes sur la céramique peinte archaïque de Susse (Mémoire de la Mission archéologique de Perse. t. XX.)

一九三三年において最も特記すべき發見は、ウル第三王朝と同時代の動物形をした把手をもつ瀝青包含有石製の容器であつた。ルーヴル宮のエラムの蒐集品の手入れと、ミレエ・マニネジイ・デュ・メアンドル及びバリーの考古

室に之等を納めたことは、今日まで倉庫の中に保存の必要あつた素晴らしい標本に場所を與へた。

近隣諸國のものに比較してスーザ土器の重要さは、それ自體に於て、從來までの結果を要約させるものである。處女地層に接して、モルガンの發掘、ド・メックナンの他の地上に於ける再調査などは、銅石器時代(石器と銅器)の地下墓地、轆轤(だが絲纜車又は小轆轤製)を用ゐるに作つた美しい形をした精緻な粘土製のうすい副葬土器(大きい杯や竈口、コップ)、その裝飾は幾何學的で自然物を基にした物(山羊、小鳥、犬、人間の顔等々)などを發見した。この自然物を基にした裝飾は幾何學的要素を兼ねて意匠化してゐた。ポッチエはこの土器をスーザ^②第

一型と名付けた。この地下墓地のま上に、もつと大きいたくさんの容器が属してゐた。形は左程スマートではなく、裝飾も鈍重、時に多彩であるが、幾何學的と自然物を基にしたものと兩方があり、自然物を基にした物には意匠化の傾向がない。發掘地點によれば、第二型は直ちに第一型につゞき、兩者をへだてる層は固いものであり、兩型間には無文土器(曲つた口と高い柄がある)を特徴として有する「中間期」がある。

スーザの西百八十軒のテベ・ムシアン^①で、モルガンの一隊に参加したゴーチエとランブルとは第一型の土器片を一つ得た、これは甚だ不完全で模様も意匠化してゐないものであつた。ポッチエは之を第一型の一變種と認めて第一型乙種と命名した。この土器はつゞいてベンデル・ブウシルや露領トルキスタンのアナウでも發見された。

スーザ第一型に同等のものがないならば、次第に次の事實が承認せられることになる、即ち、第一型乙種はメソポタミヤの所謂オベイド型に外ならないといふこと(特に、工場が遠いために生じた差異が認められる)、次に、

この「中間期」はウルクの特徴ある時期と一致すること、第三に、スーザ第二型は、その最初はデムデット・ナブルの多彩土器と同等であるといふこと。之等の重要な研究にもかゝらず、第一型、第一型乙種及び第二型の三型式が同一の遺跡で、互ひに重なり合つた状態で發見されるといふことは、いまだかつてなかつたのである。

② E. Pottery, La céramique peinte de Susse (Mémoires de la Délégation en Perse, t. XIII)

③ J. E. Gautier et G. Lampre: Mémoires de la Délégation en Perse, t. VIII.

一九三二年に、ギルシニマン(元のテロ發掘者)と共同してコントノオ博士のフランス探險隊及びギルシニマン單獨での一九三二年の發掘隊は、ルリスタンの北方なるネハヴェンドから數軒の地點にある廢墟丘テベ・ヂヤンで鐵を下した。

④ G. Contenau et R. Ghinshman, Rapport préliminaire sur les fouilles de Tépé-Gyran, près Néhavend (Perse): Syria, XIV (1933) p. I-II.

元は住居であつて後に地下墓地になつたテベは一つの土器資料を提供した。この土器はエラムに於ける諸土器

型式の年代決定をさらに嚴密にし、この土器とメソポタミアの土器との關係をすつと精確ならしめるものであつた。テベの最深部からは、復原出来る多數の破片や土器が發見された。厚さ八米から九米の層は長期の文明を示してゐる。層の下部から燧石製造具が出、その少し上から燧石と黒曜石製のものが出、上部からは少し許りの銅器が出た。この層の下部の三分の二では、ムッシアンの

所謂第一型乙種（これ自體は所謂エル・オベイド型と比較出来る）と比較出来る土器が出たが、スーザで第一型の名の下に知られた型式に屬する土器が出たのは、上部の三分の一の部分で、銅器と共にあつた。さらに、次の層では、テベ・ヂヤンでスーザ第二型と比較出来る土器を得たが、多くの標本中で、第二型のモチフとならんで、第一型からも借りたモチフのあるものが同時に現はれてゐる。従つて、古代エラムの諸土器の比較年代決定は次の様になる、(一)かくてテベ・ムッシアンの一變種が特徴を與へた第一型乙種と呼ぶもの、(二)スーザ第一型。ヂアン土器で第一型・第二型のモチフと同じものの存在は、

少くともこゝでは、スーザの「中間期」(メソポタミアではウルク期といはれるもの)と一致する)が存在しないことを示すものである。

ポツチエ^⑤は、この年代決定の顛倒の爲に、元第一型乙種をプロト・イラン土器と命名せんと提議し、スーザ第一型がプロト・イラン土器の立派な後期の製作物にすぎないので、第一型・第二型といふ名稱を明らかに變へねばならなかつた。

⑤ Communication du 29 décembre 1933 à l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

テベ・ヂヤンの上部諸層はスーザ型土器よりも多くのイラン式土器を出した。最深部諸層からは、幾何學的模様の赤い土器が發見された、この土器の特徴は柄付きの碗や三脚つきの中の凹んだ器である。次に窪口形や、圓筒柄付きの漏斗形の容器、日輪形をした蓋模様の鶏形の鳥や碁盤縞の圍繞帯で飾られた脚付きの球狀壺が出た。一部分之等のものと混つて、殆んど同一の形をした容器が出た、これはいくらか白色の土で、後期のミケネ土器に見られるやうな種々な群をなしてゐる横絲の飾りを

つけてゐる。

之につゞく土器は、無裝飾で黒光りのする土で作られ容器は時として長い鋤型形の嘴で飾つてある。之等の最後の諸層には、テベの頂上にいたるに従つて漸く豊富になる同一型式の共通土器が存在する。この頂上は、地表の遺物が鐵器時代初期か前第十二世紀頃に當る具合の未定の一時期によつて毀たれてゐる。

カスピ海の南東ダンガン^④近くのテベ・ヒッサール(一九三二—一九三三)の發掘はバルテア人の大殺戮門を探した。實際には發見されなかつた様だが、發掘主任シュミットはイランの土器に關する吾人の知識に有益な貢獻をもたらした。テベの最深層(I)から明らかに金屬容器の影響を受けた修繕した容器が現はれ、この意匠は幾何學的(基盤縞と縦に並んで波うてる縞)と動物紋で、美しい出来である。この土器は一つの金屬(青銅)器に連結したものである。次の二層からは黒色土器が出た、この兩層中の第一層(II)からは、粘土が色をかへてゐなければ、形だけでは屢々最深層のものが出た。第二層(III)では形

はさらに進化してゐた(瓶、長脚つきのコップ、犁壁形の容器)、そして屢々磨きをかけてある。シュミットはこの土器と伴ふ鐵器はこれを發見しなかつた。

④ E. F. Schmidt: Tepe Hissar, Excavations 1931: The Museum Journal (Philadelphia), Vol. XXIIV, No. 4, 1933, p. 323-487.

カスピ海の南東端でアストラバード附近のチュレン・テベは、かつて *Revue archéologique* で述べた遺寶の發見で有名になつた遺跡だが、こゝでカンサス市のウイリヤム・ロックヒル・ネルソン・トラストの爲に働いたヴルシンは梯で飾をつけられた黒色土器を一つ發見した、その形はテベ・ヒッサール(瓶、脚つきコップ)の第三層のもの等と同じであつた。エーゲ海のものと比較出来る赤土人形のある此の土器は、青銅器時代末期と同時代である。ヴルシンはたゞ二つの墓のごく表面から少しの鐵を發見した。

⑤ Pr. Wulfsin: Excavations at Turang Tépé, near Astabad (Supplement to the Bulletin of the American Institute for Persian art and archaeology, Vol. 2, No. 1 bis) New York, March, 1932.

⑥ S. Reinach, La représentation du galop. (*Revue Arch.*

ヘルセボリス近くの所謂新石器時代の一遺跡で、ヘルツフェルトは住居と土器工場の廢墟の中で、テベ・ムツシアンのもものよりも寧ろスーズ第一型の土器に近い土器を發見した。然しそれは更に大きく、種類の多い意想外な組合せをもつてをり、この組合せに於ては幾何學的意匠と自然物を基にした意匠とが新しい走書的モチーフで組合つてゐる。之によつて多くを復原し得た。發見の時から、ヘルツフェルトは別に第一型と同じく古いこの土器を紹介した、このテーゼの基礎は當時論議されてゐたのだが、ヘルツフェルトはその發掘中に銅を發見しなかつたといふ事實にもとづいてゐる。然し銅石器時代初期には、金屬は稀であつて、(スーズではその使用製作がすでに出來上る爲に十分に常例となる時代ではあるが)ごく少量だけ發見することが出来る。ヘルツフェルトの土器はスーズのものと同じく少くとも壓しつけた意匠化現象を呈し、古いものとは見えない。

⑥ E. Herzfeld: Iranische Denkmäler, I, I-2, Vorge-

西方アジアに於ける考古學的活動(中)

schichtliche Denkmäler. Steinzeitlicher Hügel bei Persepolis. Berlin, 1932 (D. Beimer)

ヘルセボリスで別の發掘が行はれた、こゝではシカゴ東洋研究所探險隊長ヘルツフェルトがアケメニード王宮の廢墟を拓いた、その基礎は記憶されない時代から、ごく薄い砂の層の下にうもれてゐた。この發掘の最初の結果はクセルセスのアバダナのバルコニーの北東側で、また王宮のプランについてゐる大きい門の北に當つて、二つの階段を發見したことであつた。埋藏の爲に保存されたこの階段の彫刻は異常に鮮明な状態にあつた。ベルシャの藝術家の支配、彼等の制限された創造の才能と同時に、一度ならずこゝでは之等の浮彫が他から知つたモチーフの繰返しにすぎないことを證明し得た。ある彫刻にはさらに色が(とくに濃い赤)塗つてあり、この彩色は處々彫刻を鮮明にしてゐる。この調査中、クセルセスとアルタクセルセス三世の數個の碑銘が發見された。^⑦

⑦ Illustrated London News, 11 Feb. 23 March 1933, 27 Jan. 1934, The Oriental Institute, p. 310-336.

⑧ Oriental Institute's Studies in Ancient Civilization, No. 5, Chicago, 1932.

ベルシヤの發掘は、オベイド型土器と比較出来る彩色土器の存在を特徴とする原始文明の重要性を明らかにした。この土器はイランの到る處に擴つてゐるやうで、一般にメソポタミヤの土器よりもすぐれてゐる。この優秀さは形態と意匠の多様性の中にあらはれ、意匠に於ては動物表現が大きい位置を占めてゐる。全體として考へると、この土器は同質的であり、眞の全體をかたちづくつてゐるが、然し乍ら各々の工場はその器形により、裝飾方法による個別性をもつてゐる、これは容易に認知出来る。

スーザの發掘は注目すべき偶然の發見たる土板(音綴表、王名のリスト)^⑩圓筒印章、白色材料で象限した容器(凡そ前第三の千年なかばの時代)などがスーザから五軒許りはなれた通稱アリ・アバードの小平テペ内で、一九三三年に得られ、かくして、一九三一年と一九三二年にネハヴエンド近くのテペ・ヂャンで、諸種の土器形式の連續に關して得た諸結果を確認することになつた。テペ・ヂャンにおけると同じく、テペ・アリ・アバードでも、第一型及び第一型乙種土器の諸層が存在する。またテペ・

ヂャンと同じくテペ・アリ・アバードでも、最深層は第一型乙種である、このま上に第一型が来る。スーザ第一型は第一型乙種を生んだところが、之と反對に第一型乙種から生れてゐるにすぎない。起原は不明だが、イランとメソポタミヤの到る處に擴れる所謂第一型乙種の土器の起原が完全なものに見られるところのスーザだけで現はれた完形土器に關する假説は、ベルシヤから地中海へ分布し、今日この廣大な地域の最古文明を形造る彩色土器文化の概念にとつて代られた。

^⑩ V. Schell: *Revue d'assyriologie*. XXXI. 1934. p. 149-166.

アクロポールでは、發掘場は四米にまで及び、細かい遺物やプロト・エラムの土板が現はれた。四米乃至五米八〇の處で墓はいくつかの寶石を包含し、五米八〇乃至九米八〇の非常に古い廢墟では陶土製の鎌、平たい煉瓦の建物遺跡があり、九米八〇乃至十一米八〇では所謂スーザ第一型土器の破片が出た。王の町では、五米乃至十二米五〇ではウル第三王朝の石棺の墳墓があり、エラム時代の殿堂址の礎からは、かつては黒色(燻)と赤色(口)で

磨かれた陶土製で、休息して集れる六匹の獅子の破片が出た。ドンジョンでは、三米三〇乃至五米六〇では建物遺

址、五米六〇乃至七米七〇からはウル第三王朝の諸墓、それから九米六〇頃では、第二型時代の墓。職人の町の上にある遺跡發掘はかくして四季毎に整然と行はれた。ド・メックナン主任は、最近數年間の詳細な報告を發表した。

⑧ R. de Mecquenem: Fouilles de Suse (1929-1933): Mémoires de la Mission archéologique de Perse. t. XXV. 1934. p. 177-237.

テヘラン市の入口のレイでは、かつてダンガン近くのテベ・ヒツサルを發掘したシュミット博士が、遺跡を構成せる諸テベの中からモスールの土器、美しい裝飾あるサツサン時代の漆喰、初期プロト・イラン文明の工場の中からレイを際立てるところの單色土器をとくに得た。この土器は更に細分することが出来る、即ち綠黄色土の土器は單色の裝飾ある赤みがかった又は草色の土器につゞくものである、と。

二年前テベ・ヂヤンの發掘をしたギルシュマンは一九三三年、ハマダン街道のヂエナツ・ナバード近くのバー

ド・ホラと、ルリスタンのネハヴェンドの南テベ・ヂヤムシデイで測量を行つた。

この兩遺跡は、テベ・ヂヤンのものと同じ型式の土器(細部では差違があるが)を大體出土した。ヂヤムシデイは、當然ルリスタン種の土器を特に出土した。ある墓は石で圍まれ板石で蔽はれてゐる、ルリスタン式と謂はれる青銅器を含む墓では、例外なく埋葬後土でみたされてゐる、之に反してテベ・ヂヤンでは卵形の溝が簡單に地中に掘られてゐたにすぎない。

一九三四年に、テヘランとイスバハンの中間のカシヤン遺跡で第二回發掘が行はれた。こゝで、ギルシュマン⑨は單色でオリヂナルな先史土器をもつ一遺跡を發見した、その或ものはテベ・ヂヤンの土器に、又その他のものはテベ・ヒツサル又はテュレン、テベの土器に接近してゐる。カシヤンではレイやテベ・ヂヤンにおけると同じく、草色土器はオベイド型と一致する黃綠色土器に先行する。

⑨ R. Ghirshman: Une tablette, proto-damite du plateau

Franke. *Revue class.* XXXI (1934) p. 115-119.
 Illustrated London News, 16 March 1935, p. 416-417.

カシヤンの發掘は、一九三三年と一九三四年におきて、プロト・エラム型土板の一變種を發見した。この近くからウルク第三層發見のと同じ圓筒が發見され、この土板の年代を確實にした。かくて始めてスーザ外の土地において、この種の資料を得たのである。

ストツクホルム歴史博物館のアルネ教授の率ゐる^⑩スウェーデン探險隊はベルシヤの北東部の史前遺跡發掘を目標とし、ロシヤ國境のアストラバードの諸テベを發掘して、昔バンベリがメルフ地方のアナウで行つた調査とアストラバードの調査とを結びつけた。

⑩ The Oriental Institute Archæo. Report on the Near East. The American Journal of Semitic Languages and Literatures, L. 1934, p. 199.

シヤール・テベ・プスルグの發掘では、一つの先史層に達し、この層の頂點には灰色土器があり、そのすぐ下に赤色や黒色の彩色土器と共存する灰黒色土器が出土した。之等の結果はアストラバードやテベ・ヒツサールの發掘

結果と十分に一致する様である。

⑩ T. J. Arne, *La steppe turkomanne et ses antiquités: Geografiska Annaler* 1935 Sven Hedm.

アウレル・スタインの英國探險隊は一九三三年と一九三四年とに發掘を行つた。第一回はベルシヤの南東部とくにメヒとシヤヒ・ツンプの兩地方を發掘した。

スタインの第一回調査の結果によれば、——インダス河谷とバンデチャブに於けるヴェダのサンスクリット語を話す種族をひき入れた民族大移動の起つたのはこの地方においてであつた、こゝからこの諸種族は全インドに分散した。この時代、北西部に彼等が到着後アリヤ種族の風俗習慣を詳しく保存して、吾人に詳しく知らしめたものはヴェダの原文にすぎないのである(例へばリグ・ヴェダの詩歌など)。たとへばこれが眞實であつても、之等の種族の眞の通路(北西による)はこの言語が東部のイラン語に由来したところの民衆のものに近いことが事實によつて證明される。この言語はアヴェスタやゾロアスタ經典によつて、その古い形に於て、保存されてゐるが、その

方言であるらしいヴェダサンスクリットに非常に近いものである。

⑦ Aurel Stein: *The Indo-Iranian Borderlands; Their Prehistory in the Light of Geography and of recent Explorations: Journal of the Royal Anthropol. Institute*, LXIV, 1934, p. 179-202.

これにもかゝはらず、前第十七世紀には、ヴェダ語を語り、リグヴェダの詩中の神々を崇拜した一民族は今日クルヂスタンといふ地方に生活してゐる、そしてモヘンヂョ・ダロやハラッパの發見は、千年前において、印度のインド・アーリヤ文化の發達に影響を與へた宗教・信仰・藝術をもつた一民族がそこに居たことを明らかにした。侵入者たるアリヤ人は、この故に、野蠻人の地方を征服しなかつた。黒い皮膚をもつた敗北せる民族が、リグ・ヴェダによれば、侵入者の吸收を容易にしたことを示してゐる。かくしてモヘンヂョ・ダロで明らかとなつた信仰はインド宗教を支配し續けたのである。

イランから來るには二つの路が可能である。第一は沙漠の北側で、アゼルバイジャンからエルブルズに沿つた

路で、スキート・バルテア・トルコ諸族の移動が利用したものである。第二はクルヂスタンの南で、ルーリスタン、バクトリア地方、アラビスタンを經てファールとケルマン兩河谷へ向ふ路、これである。

ベルシヤ領ベルチスタンに於て、マクスーンの乾燥は（アレクサンドリヤがその例であるが）游牧人にとつては障害ではない。例へば、バンヂャブの南部及び南西部に居をきめたベルチ族の中世に於ける移動の如し。

さらにスタインの考へにしたがつて、アヴェスタの言語の中に、とくにガタ語の中やヴェダ詩篇の中に保存される最古の形式の中に存在する關係を見よう。——東部のイラン語を話す種族はこの詩篇をつくつたアリヤ人と密接してゐねばならぬ、またこれはエルマンド盆地に於てゝなければならぬ。要するに、テペで行はれ、明らかになされた多くの調査にもとづいて、また、破片によつて原文が吾人に僅かに語ることは、このプロト・イラン文明の存在といふことである。即ちベルシヤのこの部分に、歴史の黎明以前に早くも屢々交通に用ひられた眞の通路

が存在したといふことである、と。

ベルセポリスに於て、豊富な碑銘が発見された、アケメニド時代の金や銀の板、これらは宮殿のキソを記念したもので、さらに大部分アンザン語で書かれた数千の土板と破片が出た、計算資料も。

IV 小アジア

長年中絶してゐたボガス・クイー^⑬に於けるドイツの發掘は、通稱ビュルク・カール發見建物の暴露を行つたクルト・ビツテル指揮の下に再開された。發掘はヒツチツト原文に貴重な寄與をなした、一九三二年には八百の文獻的土板片、一九三三年には二千六百片。

⑬ Forschung und Fortschritte. IX (30 Jan. 1933) p.

33-34.

シカゴ東洋研究所も小アジアで大調査に努力した。フォン・デア・オステン、シニミット兩氏次でフォン・デア・オステン氏獨りでアリシャル・ヒュユクの遺跡を數回掘つた。その目的とする處は、小アジアに於ける文明の諸段階を決定することであつた。その結果吾人にこの證明が

なされた、即ち多くの年代の間に修理された要塞と一度ならず導きの絲の役を演じた土器とが。最近の發掘報告は古い報告の二三の未定事實を適當な状態に直し、次の如き連絡を設けた、即ち、地表下十九米までによく燧かれた磨研黒色土器がある(ハス・ヒュユク^⑭でドラボルトが発見したのと同じもの)。この層は新石器時代と名付けられたが、古代青銅器時代に屬するらしいトロヤ第一期の土器と比較される。第一層は磨かれた赤色土器を有し、とくに脚のない二つの柄ある杯や、トロヤと多島海のものと同じ人形とを含む。この層の終るところに、幾何學紋で彩色ある意匠の土器があり、第二・三層は部分的には同時的である。第二層はカッパドキヤ土板を特徴とする時期(第二の千年初期二千年のあたり)に相應し、圓壁つきで長い犁壁があり、明らかに金屬器の原型をまねた高い柄のあるキュール・テベ^⑮のと同じ土器が発見された。次で所謂カッパドキヤ群の土板と、その主題がこの土板の痕跡にも比較出来る印章とが発見された。第三層はヒツチツト時期に當る、圓錐底の高柄つきコップ、模様は明

るい地に黒色又は赤色の幾何學的彩色、同じ意匠で兩側に柄のある杯がある。ヒッチット帝國没落に直ちにつゞく時期(第十二世紀)に當る第四層は、もつと精緻な繪が描いてあり、前の層のよりもずつと美しいモチフの土器を有する。印章は胸中の膨らんだ圓板形をしてをり兩面にはヒッチットの楔形文字が彫つてある。この層に於ける莫大な鐵器の存在は、しかし乍ら、他の遺物の性質にならつて、さらに古い時代を定めることを不可能にする。

- ⑩ H. von der Osten: Discoveries in Anatolia 1930-31 (Oriental Institute Communications, No. 14, Chicago 1933) E. Schmidt: The Alishar Hüyük, Seasons of 1928 and 1919, part I. Chicago 1932.

- ⑪ L. Delaporte: Grabung am Hashiyük 1931 (Archäol. Jahrb. Anzeiger, 47. 1932 col. 230-233) キルメヒヒールから凡そ三十五軒のハシメユクでは三つの土器層がある、黒色で磨かれたもの、茶褐色と赤色、この二つは模様がある、この層は厚さ十メートル以上である。

- ⑫ F. Hrozny: Rapport préliminaire sur les fouilles tchécoslovaques de Kitépé (Syria, VIII, 1927, p. 1)

一九三二年發見の一建物の中から一九三四年には九百

西方アツアに於ける考古學的活動(中)

箇の土板片が現はれた、これはボガス・クイの廢墟中のビュクカレエの遺跡に於て、あつた。その目的は不明であるが、この建物は二十米×五米七五の三つの平行せる大室より成り、各々の側に二つ又は三に分れた小室がついてゐる。灰燼後の再建の時に、三つの大室の各々に七つづゝの柱を二列に並べた。この杖は石の土臺の上で、生の煉瓦で出來た臺で造つてある。水道管がこの建物についてゐる。ピツテルが發見した土板は千二百年頃に建物が破壊された後廢墟を均らし、後の再建をする爲に運ばれた土の一部をなしてゐる。(同じ狀況はマクリデイ・メイによつて一九〇七年と一九一一年とに發見された土板にも認められる)。土器の知識はこの發掘に利益を與へた、ヒッチット期につゞく景色のモチフのある最古の古器を、その次に出て來る赤色と黒色で描かれたモチフを有する土器から區別することが出来る。

V シリヤ

第二十二卷 第二號 四〇七

發掘と云つては適當ではないが、P. ボツドバルの「航空機による備戰國」⁽²⁰⁾について特記せねばならない。これは古代の道路、地上では姿も見えない建築址を發見せしめ、かくしてこの地方の古い地貌を再現せしめた。

⁽²¹⁾ A. Foltbard: Recherches sur le limes romain (Syria, XII, 1931, p. 274)

ホプキンス博士指揮のエール大學とデュ・メニル・デュ・ブイツソン指揮のフデンス「古碑文學」アカデミーのドウラ・ユーロポスにおける發掘は、二年前において、壁飾りのあるキリスト教會堂の一つを掘り出した。⁽²²⁾ 西紀前三百年頃ギリシャ人が建てたキャラバンの町ドウラは、紀元後の二五六年に破壊された。城壁に沿うて積み上げられた防禦設備は、アレキサンドル峻嚴王時代(第三世紀の前半)の教會を保護してゐる。この中にはダヴイド王とゴリヤテ、善き牧人、イエスと不隨患者、水上を歩むイエスなどを描いたフレスコがある。之等の發見はキリスト肖像學史にとつては甚だ重要なものである。更に紀元後初期のアルテミス聖殿、裁判所、そしてユーフラテス河畔のアナートではアフアルド神の聖殿が城の塔の中

から現はれた。神は戰士に象られ、二匹の獅子の背に立ち、一人の僧がその前で犠牲を供へてゐる。

⁽²³⁾ Syria, XIII (1932) p. 223. Illustrated London News, 13 Aug. 1932, 29 July 1933.

一九三二年にはこの教會堂の傍で、ユダヤ教會堂(八米×十三米の面積)が發見された、これは一種の玄關になつてゐる廻廊をもつた中庭で、街路から隔たつてゐる。會堂の周りには石膏のベンチがある。フレスコは舊約聖書の諸情景を描いてゐる。僧エゼキエルの像は、太陽と月の像の下に立ち、兩手はかくれてゐる。多數の彩色瓦が天井を飾つてゐる。四枚葉のクローバなどが瓦に飾られてゐる。ドウラの發掘は、この地方全體におけるパミル藝術の強い影響を示してゐる。

⁽²⁴⁾ Syria, VIII, 1932, p. 313.

パミールでは、シリヤ考古學調査官長セイリグ氏指揮下に、凱旋門の補強工事と繼續してヘル神殿の清掃が行はれてゐる。一碑文はその祝聖式を紀元後三十二年と定めてゐる。

⁽²⁵⁾ H. Seyrig: Antiquités syriennes (Syria, XIV, 1933, p. 152 et suiv.)

アンチオケア湖原のチャタル・ヒュユク^㉔では、アンチオケア博物館長プロストの指揮下にシカゴ東洋研究所の手で、メギッド丘よりも大きい丘の調査が行はれた。発掘者はここでハツチヌ國の首都クヌルアを発見せんと努めた。遺跡は科學的に露はにされ、近き將來において目的の層位が発掘されるものと期待されてゐる。

㉕ The Oriental Institute, p. 301-309.

アレツポから二百七十米北方のマラチア附近のアルスラン・テペで、ルーヴル博物館員ドラボルトは二年來發掘をつゞけてゐる。紀元前第八世紀のヒツット族の一宮殿から(その北門には石造獅子が建てられてゐる)、多數の神々に灌奠式を行つてゐる一王族を描ける浮彫があらはれた。この浮彫はスタンブール美術館に保存されてゐるもの、一部をなしてゐて、これはボガス・クイのアナトリア藝術の影響を受けてゐる。同じ場所から、これより新しい一つの王族の巨像があらはれた、これはアッシリヤの影響をうけてゐる。

㉖ L. Delaporte: *Malatia* (Rome *histoire et asiatique*).

Journal 1833, p. 129-131.

西方アジアに於ける考古學的活動(中)

Fouilles de Malatia 1932 (Archäol. Jahrb. Anzeiger 1933 p. 183-188)

ハマにおいては、ベイルート米國大學考古學教授インゴルト指揮下の丁採調査隊が、科學的に丘を發掘した。カルケミツシユ出土の同様の遺物を思はせる様式の圓筒が現はれた。

一九三三年八月、カバーヌ中尉は、視察中アブケマルの北西十二軒のテル・ハリリで土人が地中から一像を掘り出してゐる有様を見た。中尉の報告をうけて、アレツポ博物館長プロワード・ロトルーの肝煎で三百疋もあるこの像が、アレツポに運ばれた。これはバルビユ神を現はし、胸は露はで突出し、スカートをはいてゐる。スカートの上には鱗をならべた模様の衣が彫られてゐる。これは實に、朝早くシャマツシユが現はれる東方の山を表象する像である。ルーヴル美術館と文部省とはパロー師に該遺跡の發掘を任せた。この遺跡は早い時代に造てられた低い丘で殆んど地表に非常に古い遺物を收めてゐた。決定的な報告を行ふにさきだつて、パローは概報と講演において發掘成果を報じた。發掘は墓地に及び、二層に

第二十二卷 第二號 四〇九

分れた埋葬に於て、遺骨の傍にアシッラ及びキッシュ出土と同じ主として刻文ある大甕が置いてある、この墓は先サルゴン期に屬する。

- ②⑤ A. Parrot, *Illustrated London News*, 13 Oct. 1934.
 La civilization mésopotamienne: *Revueassyriologique*
 XXXI, 1934, p. 180-189.

イシヌタル神殿の地下聖堂内に多くの彫像が発見され、その配置はアツスルのイシヌタル神殿と同じであった。三像はチヌロー・ダンデヤン所譯の文書を持つてゐる。この結果、テル・ハリリは一王朝の所在地又は首都として王朝の書面に記載されたマール市の遺跡たることが判明した。細かい粒より成る石造の彫像は非常にすぐれた出来であつて、ハファアチエヤテル・アズマールで、同期にフランクフォルトによつて発見された彫像と一致し、先サルゴン期の彫刻の一例外を形づくる。

- ②⑥ *Inscriptions votives sur des statuettes de Mari: Revueassyriologique*, XXXI (1934), p. 143.

彫像の一到エビヒルと稱する一人物像がある、イラクで発見され、また多くの圓筒上に繰返し描かれたものと同じく、編んだ蘆座の上に坐つてゐる。これは動物の皮

の様に見える長い緒のついた衣を着てゐて、大英博物館の像を思はせる。^{②⑦}

- ②⑦ C. L. Woolley, *Ur Excavations. II. The Royal Cemetery*, London, 1934 pl. 214 no. 355.
 ②⑧ H. R. Hall, *La sculpture babylonienne et assyrienne au British Museum*, 1928, pl. IV.

テル・ハリリで行はれた別の發掘では、ウルの『旗』のそれと同じ暗い生地に象眼されるべき螺鈿板が現はれた、ウルのものはこれより粗末であるが、キッシュのものには特にその様式と仕上げにおいて接近してゐる。復原して見ると、背中に腕を縛り上げられた裸體の捕虜を、キッシュ出土のものの様に、短い下着を着て帽子をかむつた人々の前に引つれる戦士の繪である。その少し遠くの方に、戦車一臺とその駢馬との殘缺が配置されてゐる。これは馬ではない、體は缺けてゐるが尾が残つてゐる、これで推して見ると半驢カマドか驢馬カマドで、要するに野生の驢である。フランス側の入手したこの遺物の一部はルーヴル博物館の二階に在るデュラフォア室に保存され、他の部分はアレクソポ博物館にある。

數年來の出土遺物の調査によつて、それらの相對年代

を決定することが出来た。フランクフォルトとパローによれば、テル・アズマールの彫像が先サルゴン初期で、マリーのが中期となる。然し、この先サルゴン期の期間は如何？ 最後の時期を約二千七百五十年とすれば、初期は確實ではない。ウリーはメソポタミア藝術が本質上、停滞的』であり、モチフも非常に長い時代にわたつて維持され得ることを述べて、以上の決定に反対した。東洋藝術の停滞説は否定出来ない。場面も主題も非常に長い期間傳へられるが、同一である場合は極く稀れである。或る點で更新され、わづかの變化をうける。同様の細部の永續は諸事件の累積をうたがはしめる。恐らく、先サルゴン期遺物の同質性のために、將來の發見品はその多くの徴證がごく短い年月の上に展開したか、或ひは同時期であり得たところの期間を更に縮める結果をもたらずである。然し、後述する様に、漠然と引下けられ得ない時期を出発點とする條件で、即ち初期をエヂプトと同期とする理由で、同様の考へは古い時代(オヘイマ・ヂュムデット・ナズル)にも適用される。この時代が遺した遺物層

西方アジアに於ける考古學的活動(中)

の厚さによつて、その期間を評價することはむづかしい。礎石の上に建てられた煉瓦建築は、毎年修繕を要した葺と乾泥混りの住家よりも役に立ち、そして廢墟になりにくい。

テル・ハリリの發見に對する解釋についてはパローの意見と異つた見解もある。氏はラグランデュとヴァンサン兩氏にならつて、この藝術に「メソポタミヤ」式の名を與へようと要求し、既に用ひられてゐる。ポッチエ氏は講義において之を用ひ、コントノオも用ひてゐる。然し地理的な言葉たるメソポタミヤといつて、この藝術の起源を示す『スメル』を考へるのを止める必要はないだらう。パロー氏によれば、このスタイルと同じく完全に、古代的で、且つずつと西の方へよつた遺物が出たのは、これが始めてである。彫像の型式はセム族で、その碑文はセム語、そして昔からの宿題たる『セム族とスメル人』の問題は明らかに再發する、といふのが彼の結論である。

⑤ L'art de l'Asie occidentale ancienne (Van Oest), 1928
p. 5 et 51.

これは確かではない。論争の中心となつてゐるルーヴルの像は非常によく保存されてゐる。そこにはスメル人の作品によく見られる活氣と調子とが見られないが、雪花石膏といふ材料がその原因であり、これはセムの影響ではない(然し乍らこの影響はこの意味で、バビロニヤ第一王朝時代のセム人の支配時期に關係してゐる)そのスタイルは今日までスメル人のものと定められてゐるものだ。外形は同様である。鷲の様に甚だしく曲つた鼻はセム人(アルメニヤ人の鼻のものではない。エビヒル出土像の鼻は他のスメル人の像の鼻である。低く傾いた額はスメル人の額であつて、セム人の額ではない。

民俗的な藝術とタイプとがスメル人のものであるならば、他の二像と同じくエビヒル碑文の固有名詞はセムのものであらう。然し碑文はひとり表意文字で書かれてゐる、唯一度前置詞アナだけがセム字で書かれてゐる。書記は自分の言語をスメル人にならつて二度の題寄デイクリスにおいて、この前置詞使用をやめてゐる。西方から來たセム族がこの地方で、自分の言語をスメル人の文字に合せ、さ

らにそのすべての材料を知らなかつたといふ遺物を吾々は身近に持つてゐるのである。

エビヒル像の時期はいつか? 碑文の記號はステール・デ・ヴォツールのものに比較出来る、古代的でない『彼』なる記號を除いては。然しこれも古代的にまねてある、殆んど同様な形の下で、これはサルゴン期、或ひはマニシツユス②①以下のものである。他方、髯はその非常に特徴的な仕上げと共に、ステール・デ・ヴォツールのニン・ギルシヌ神の髯や、特にルーヴル藏のウルク王ルユガル・キザルシ胸像を思ひ起させる。さて、チェロー・ダンヂヤンの説では、ルユガル・キザルシは「サルゴンと同期のルユガル・ザツギシより後のものではない、そしてこれを非常に古いものとすることは出来ないだらう。」と。コントノーの意見では、エビヒル像は、そのスタイルと碑文とよりして、せいぜい西紀前第二十九世紀の前半と見られてゐる。

②① G. A. Barton: *Babylonian Writing*, Leipzig (1913) *signe 206*, p. 50.

②② Contenu, *Statuette de Longai-kisalsi*, (Monuments Mé-

sopotamiens nouvellement acquis ou peu connus. Musée du Louvre. P. 1934. p. 5, pl. I.

③⑥ Statue d'un petit-fils de Lingal-Isaisi, roi d'Urak. Revue d'assyriologie. XX. p. 5.

かく考へられて來ると、この古代性に關する論争は不可能となる。アシヤラの發掘はさらに、ずつと古い時代に、もう少し西方においてスメル藝術の存在したことを證明した。

一九三四年のドウラ・エフロボスにおける發掘物は、前發掘同様の大きい關心を唆つた。發掘隊は無敵の太陽神ミトラに捧げられた教會堂を發掘した。これはシリヤにおいても、小亞細亞においても、此の種の遺物は最初のものである、そしてこの事實は東方にローマ軍隊によつて傳へられたこの神の崇拜同様に奇妙なものである。そしてこれは紀元後第三世紀にキリスト教と敵手となつてゐる。この神殿は、東側の壁の凹所ニッチには煉瓦造りのベンチをほりつけてある小さい建物である。裝飾はこの凹所の上下二つの場所に浮彫でされてゐる、一つの方は第二世紀末のもので、ミトラ神はこの浮彫の寄進者の前で野

牛を殺しつゝ、犬と鳥とをしたがへてゐる。もう一方の繪は野牛と戦ひつゝ同じ従者をつれてゐる。凹所は獸帯記號を表す繪や、ミトラ神話(その生ひ立ち、一生、太陽の征服までの勳功)を扱つた場面ニッチで飾つてある。凹所の兩側には、ミトラの弟子たるゾロアスターとオスタネスの兩神が表はされてゐる、之等の繪の特徴はビザンチン繪畫を豫想させるものがある。就中、最も興味ある場面は、馬に乗つたミトラが逃げ行く野獸に矢を放つてゐるもので、このフレスコはベルシヤ繪畫を示してゐる。東方藝術の寶庫としてのドウラ・エフロボスは發掘の度毎に報ひられ、同時に宗教史上測り知るべからざる貢獻をなしてゐる。

③⑦ Illustrated London News, 8 Dec. 1934. p. 963-965. セイリグ氏指揮のバミール調査は、一つの神殿を露出した。發掘中多くの遺物が現はれ、とくに多くの碑文が出て、近く發表される筈である。

③⑧ N. C. Debevoise, Amer. Journ. Semitic Languages, etc., April 1934. p. 190.

パールベックでは、最近の調査が全く廢墟の様相を變

へてしまつた。『テオドーゾスのバジリカ』は姿を消して、大きい神殿がいまや完全に發掘された。

チャタル・ヒユユク^{③④}ではマクエワン博士の指揮下に、研究が續行された。第二層は紀元前第二世紀頃のヘレニスティック時代のものである、然し建物の廢墟は極く少い。舗道の下に第三層がある。こゝには紀元前第八、又は第九世紀の特殊な家の煉瓦壁があつた。礎石はない。遺物は非常に多い、第三層中では厚い大きい土器や、褐色磨研の輪足つき器、共通の外形は大きい鉢である。多數の印章は、鏤蟲形をしてゐる。

^③ Syria, XV. 1934 p. 155-186 pl. XVIII-XXIV.

インゴルト指揮の丁抹調査隊はハマにおいて、ローマ時代の建物が、丘の中央で姿を消して、その下から鐵器時代に相當する諸層が現はれた。調査は地山まで行はれ(アラビヤの人の層からは二十五米、丘の頂上からは三十米)、ハマがシリヤの古代土器の爲の貴重な遺跡であることを知らしめる如き時代まで發見せしめた。最も深い二つの層は、一つは彩色土器、他はメギッドやベイザンに

相當する土器に比較出来る黑色又は灰褐色の土器を出土した。また青銅中期の供獻用小像と皿の足とが出た。

^④ A. J. A. XXXVIII. 1934 p. 198

最後の調査においてこの丘の南方で、一行は、^⑤ヒツチツト時代の一建物を發見した。

^⑤ Revue archéologique syrienne. Oct. 1934. p. 13.

(シマ)